

OLYMPUS

Your Vision, Our Future

2017年3月期 第2四半期 決算説明会

2016年11月2日
オリンパス株式会社
代表取締役社長執行役員
笹 宏行

(スライド1)

- オリンパスの笹です。
- ご多忙の中、オリンパス株式会社「2017年3月期第2四半期決算説明会」にお集まりいただき誠にありがとうございます。
- 本日は、まず私からこの第2四半期決算の概要と、中期経営計画の進捗についてご説明します。

ハイライト

上期実績

- 為替影響を主要因とし前年同期比では減収減益となるも、営業利益、経常利益、当期純利益は前回(1Q時)見通しを達成

通期見通し

- 円高が進む英国ポンド、中国元の為替および、現状の事業環境を鑑み、売上、営業利益等の見通しを修正するも当期純利益は前回見通しを維持
- 主力の医療事業は現地通貨ベースで前回の営業利益見通しを据え置き

中期経営計画（16CSP）の進捗

- 戦略に基づく施策を着実に実行し、いくつかの成果が現れている

2 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

OLYMPUS

(スライド2)

- スライド2ページをご覧ください。
- まず上期実績としては、為替の影響が大きく、前年同期比では減収減益となりました。
- しかし、見通しに対しましては、費用管理を徹底した結果、営業利益以下の各利益が見通しを上回る実績となりました。
- 通期見通しについては、急速に円高が進んだ英国ポンドおよび中国元の為替を今回見直しております。
- これにより、売上高、営業利益等は業績見通しを修正いたしましたが、当期純利益は前回見通しの金額を確保いたします。
- また、主力の医療事業においては、年間を通じて現地通貨ベースでの営業利益は前回見通しの水準を達成してまいります。
- 今年3月に発表しました中期経営計画（16CSP）の進捗についてもいくつか触れさせていただきます。
- 各事業、各機能において、戦略に基づく施策が着実に実行されておりますので、徐々に成果を上げ始めている取り組みについてご説明させていただきます。

第2四半期実績

- ① 前年同期比 : 厳しい事業環境の中でも、為替影響調整後では前年並みの売上高を確保
 ② 業績見通し比 : 営業利益以下の全利益項目で1Q時見通しを上回る実績

第2四半期累計 (4-9月)

(単位: 億円)	2016年3月期	2017年3月期 (1Q時見通し)	2017年3月期	増減額	前年同期比	見通し比	為替影響調整後 前年同期比
売上高	3,958	3,660	3,500	▲458	▲12%	▲4%	① ▲1%
営業利益 (営業利益率)	501 (12.7%)	290 (7.9%)	② 344 (9.8%)	▲157 (▲2.9pt)	▲31%	+18%	▲3%
経常利益 (経常利益率)	435 (11.0%)	250 (6.8%)	288 (8.2%)	▲147 (▲2.8pt)	▲34%	+15%	
当期純利益 (※) (当期純利益率)	358 (9.0%)	200 (5.5%)	222 (6.3%)	▲136 (▲2.7pt)	▲38%	+11%	
円/USDドル	122円	107円	105円	▲17円(円高)			
円/Euro	135円	119円	118円	▲17円(円高)			
影響額: 売上高	-	▲380億円	▲435億円				
影響額: 営業利益	-	▲150億円	▲143億円				

(スライド3)

- スライド3ページをご覧ください。
- こちらが第2四半期の実績です。
- 決算数値の詳細は、財務担当の竹内からご説明いたしますので、私からは上期実績のポイントのみご説明いたします。
- 上期は想定以上に厳しい事業環境となり、前年同期比では減収減益となりました。
- しかし、現地通貨ベースでは医療事業が堅調に推移しており、為替の影響を除いた後では前年並みの売上高を確保できております。
- 効率的な支出の管理や、すべての業務や施策の優先順位について見直しを行う等の取り組みの結果、営業利益以下の全利益項目で見通しを上回る結果となりました。

事業環境認識

- ① 医療ニーズの増大等、中長期の環境認識は不変
- ② 世界経済の見通しには依然として不透明感

1Qにおける環境認識

- ・ 中国を始めとした新興国経済の成長率鈍化
- ・ Brexitによる一段の円高
- ・ 資源安の長期化
- ・ 熊本地震

② 現時点における環境認識

- ・ 中国を始めとした新興国経済の成長率鈍化
- ・ 不安定な為替相場
- ・ 資源価格は依然として歴史的に低水準

① 16CSP期間における環境認識

- ・ 少子高齢化
- ・ 医療ニーズの増大
- ・ 医療費抑制圧力
- ・ 症例数の増加と施設数の減少
- ・ 科学分野の顧客ニーズの多様化
- ・ デジタルカメラ市場の縮小

16CSP経営目標達成に向けた戦略を確実に遂行

4 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

OLYMPUS

(スライド4)

- スライド4ページをご覧ください。
- まず16CSP期間における中長期の環境認識には変わりはありません。
- 現在、置かれた事業環境に柔軟に対応しつつ、16CSP経営目標の達成に向け、必要な投資、戦略を確実に遂行してまいります。
- 次に、今期の通期見通しの前提となる事業環境認識についてご説明いたします。
- 世界経済は、中国を始めとするアジア新興国等の景気に減速傾向が続いているほか、イギリスのEU離脱の決定による影響から、先行きが不透明な状況が続いております。
- 特に為替相場に関しては、ブレグジット以降英国ポンドが急落しており、またアジア通貨も円高基調にあるなど不安定さが増しております。
- これを受けて、ポンド・人民元を中心に通期業績に対する為替影響を1Q時点よりも保守的に見直しております。
- また、資源価格は依然として歴史的な低水準にあり、この影響を受ける、当社、科学事業の置かれた環境は厳しさが継続するものと見込んでおります。
- しかし、一方で医療事業については、今ご説明しました為替の影響はあるものの、1Q時点から事業環境認識に大きな変化はございません。
- では、こうした環境認識を踏まえた通期の見通しについてです。

通期見通し

① 為替および事業環境が激しい中でも前回見通しの当期純利益は確保

(単位：億円)	2016年3月期 (実績)	2017年3月期 (前回見通し)	2017年3月期 (最新見通し)	増減額	前年比	為替影響調整後
売上高	8,046	7,750	7,430	▲320	▲8%	+3%
営業利益 (営業利益率)	1,045 (13.0%)	770 (9.9%)	720 (9.7%)	▲50 (▲0.2pt)	▲31%	▲1%
経常利益 (経常利益率)	909 (11.3%)	670 (8.6%)	600 (8.1%)	▲70 (▲0.5pt)	▲34%	
当期純利益 (※) (当期純利益率)	626 (7.8%)	570 (7.4%)	570 (7.7%)	— (+0.3pt)	▲9%	
EPS	183円	167円	167円	—	▲9%	
円/USドル	120円	106円	105円	▲1円(円高)	▲15円(円高)	
円/Euro	133円	117円	117円	▲0円(円高)	▲16円(円高)	

5 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

(※) 親会社株主に帰属する当期純利益

OLYMPUS

(スライド5)

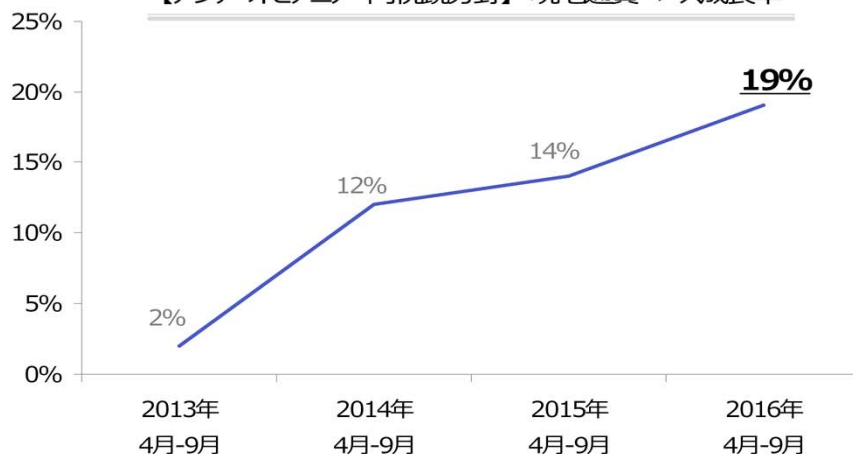
- スライド5ページをご覧ください。
- ただいまの事業環境認識と第2四半期までの実績を踏まえ、通期見通しを修正しております。
- 円高が急速に進んだ英国ポンドおよび中国元の為替を見直したことに加え、上期に営業損失となった科学事業の業績見通しを修正したことにより、日本円ベースでは減収減益方向に見直しております。
- 連結の営業利益、経常利益についても修正しておりますが、当期純利益は前回見通しの570億円を達成していきます。

中期経営計画（16CSP）の進歩 ①

事業戦略：医療事業の成長「内視鏡分野・新興国でのビジネス拡大」

- アジア・オセアニア地域売上高が前年同期比2桁成長
- 東南アジア地域の成長加速を目指し、タイにトレーニングセンターを設立（7月）

【アジア・オセアニア 内視鏡分野】 現地通貨ベース成長率



Thai - Training and Education Center (T-TEC) の外観・内観写真



OLYMPUS

6 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

（スライド6）

- スライド6 ページをご覧ください。
- ここからは、16CSP初年度の中で、徐々に成果を上げ始めている取り組みについてご紹介させていただきます。
- 事業戦略の中心となる「医療事業の成長」の重点戦略のうち、先ず内視鏡分野でポイントとなる「新興国でのビジネス拡大」です。
- 内視鏡分野では、先進国においては圧倒的なシェアを維持し、安定成長を目指していますが、新興国市場はポテンシャルが大きく、成長のための重要なドライバーとして、ビジネスの拡大を図っています。
- ご覧のグラフは、アジア・オセアニア地域の前年同期比の成長率です。2桁の伸びを示し、成長を続けています。
- 当社では内視鏡を販売するだけでなく、それを安全に使っていただくため、医療従事者の皆様への教育をトレーニングセンターなどで実施しています。今年7月には、東南アジア地域で初めてとなる内視鏡のトレーニングセンターをタイで本格稼働させました。
- このトレーニングセンターはタイだけでなく、ASEAN地域の医療従事者を対象としており、今後ASEAN地域の戦略的な重要拠点として位置づけています。こうした活動を続け、新興国での安定的な高成長を継続していきます。

中期経営計画（16CSP）の進歩 ②

事業戦略：医療事業の成長「シングルユース・ビジネスの拡大」

■ 販売体制強化および製品ラインナップ拡充により、シングルユース・ビジネスの売上高が持続的に成長

● 外科エネルギー：

単独商品 サンダービートの売上高が着実に拡大

✓ 北米 2017年3月期2Q 現地通貨ベースで前年同期比 2桁の成長

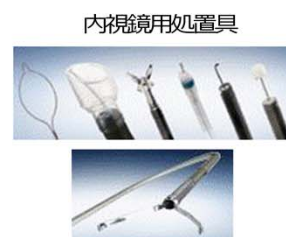


● 処置具：

最大市場の北米において、販売体制強化の効果が顕在化

✓ 北米 2017年3月期2Q 現地通貨ベースで前年同期比 15%成長

✓ 10四半期連続で前年同期比 2桁の成長



OLYMPUS

7 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

(スライド7)

- スライド7ページをご覧ください。
- 次に「シングルユース・ビジネスの拡大」に向けての状況です。
- 16CSPにおいて症例数ベースのビジネスの拡大を重要施策として掲げており、それに向けてシングルユース・ビジネスの強化を目指しています。
- シングルユース・ビジネスにおいては、外科エネルギー分野のサンダービートと消化器内視鏡分野の処置具が代表製品になりますが、最大市場の北米で成長軌道に乗っています。
- サンダービートは、シングルユース・ビジネスの拡大に向けて重要となるラインアップ拡充を目指し、発売以降、用途に合わせて長さや機能が異なるシザーズを次々と投入しております。
- この第2四半期の現地通貨ベースで前年同期比 2桁成長となっております。
- また処置具でも製品ラインアップの強化を継続しています。
- 特に重点を置いている北米では、2013年のセールスリソース強化の効果もあり、処置具分野では10四半期連続で前年同期比2桁成長するなど、シングルユース・ビジネスが順調に拡大しております。

中期経営計画（16CSP）の進歩 ③

重点戦略：経営資源の集中

■ 拡大事業領域への経営資源のシフト

- NOC日本アウトソーシング株式会社をロングリーチグループへ譲渡（10月31日）
- 第3四半期決算において約38億円の特別利益を計上見込み

重点戦略：コーポレート・ガバナンスの強化

■ 取締役会の実効性向上に向けた取り組みを株式市場へ説明

- 昨年に続き、取締役会評価の結果を開示（6月28日）
- 独立社外取締役兼 取締役会議長によるガバナンスに関する説明会を開催（9月28日）

（スライド8）

- スライド8 ページをご覧ください。
- 事業面以外の取り組みについても2点ご紹介いたします。
- まずは1点目は「経営資源の集中」の事例です。
- 16CSPでは医療事業に経営資源を重点投入し、医療分野における世界トップレベルのプレーヤーになることを目指しています。
- 必要な経営資源を確保し、最大活用していくという観点に加え、人材サービス事業を行うNOCのポテンシャルを最大化するため、外部へ株式を譲渡することを決断いたしました。
- 今後も必要に応じて事業ポートフォリオの見直しを進め、拡大が期待できる事業領域へのシフトを進めてまいります。
- 2点目は「コーポレート・ガバナンスの強化」です。
- 中でも独立社外取締役が過半数を占める取締役会は、当社のガバナンス強化の象徴です。
- 当社では2011年の不祥事発覚以降、ガバナンスの強化に取り組んでまいりました。
- こうした取り組みを投資家の皆様にもご理解いただけるよう、「取締役会評価」の開示や「社外取締役による説明会」等、コミュニケーションを強化しております。
- 今後もこうした株式市場と積極的に対話する機会を増やし、ガバナンスの強化に役立ててまいります。



OLYMPUS

(スライド9)

- 以上、16CSPの進捗について、事例を挙げてご説明させていただきました。
- 短期的には厳しい事業環境となっておりますが、中長期の成長を実現するための戦略を着実に実行し、16CSP経営目標達成に向けて全社一丸となって取り組んでまいります。
- 私からの説明は以上です。ご清聴ありがとうございました。

2017年3月期 第2四半期 連結決算概況

2016年11月2日
オリンパス株式会社
取締役兼社長執行役員 CFO
竹内 康雄

(スライド10)

- 財務担当の竹内です。
- 私からは2017年3月期第2四半期の決算数値の詳細および通期見通しについてご説明申し上げます。

2017年3月期 第2四半期 連結業績および事業概況

(スライド11)

- まずは、第2四半期の連結業績と事業毎の概況です。

2017年3月期 第2四半期実績 ①連結業績概況

① 上期営業利益は、コスト管理の徹底等により、1Q時見通しを上回る着地

② 厳しい為替状況においても営業利益率は約10%

第2四半期累計 (4-9月)

(単位：億円)	2016年3月期	2017年3月期 (1Q時見通し)	2017年3月期	見通し比		前年 同期比	為替影響調整後 前年同期比
				増減額	%		
売上高	3,958	3,660	3,500	▲160	▲4%	▲12%	▲1%
売上総利益 (売上総利益率)	2,628 (66.4%)	2,422 (66.2%)	2,328 (66.5%)	▲94	▲4%	▲11%	+1%
販管費 (販管費率)	2,127 (53.7%)	2,132 (58.3%)	1,984 (56.7%)	▲148	▲7%	▲7%	+2%
営業利益 (営業利益率)	501 (12.7%)	290 (7.9%)	344 (9.8%)	+54	+18%	▲31%	▲3%
経常利益 (経常利益率)	435 (11.0%)	250 (6.8%)	288 (8.2%)	+38	+15%	▲34%	
当期純利益(※) (当期純利益率)	358 (9.0%)	200 (5.5%)	222 (6.3%)	+22	+11%	▲38%	
円/USドル	122円	107円	105円				
円/Euro	135円	119円	118円				
影響額：売上高	-	▲380億円	▲435億円				
影響額：営業利益	-	▲150億円	▲143億円				

12 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

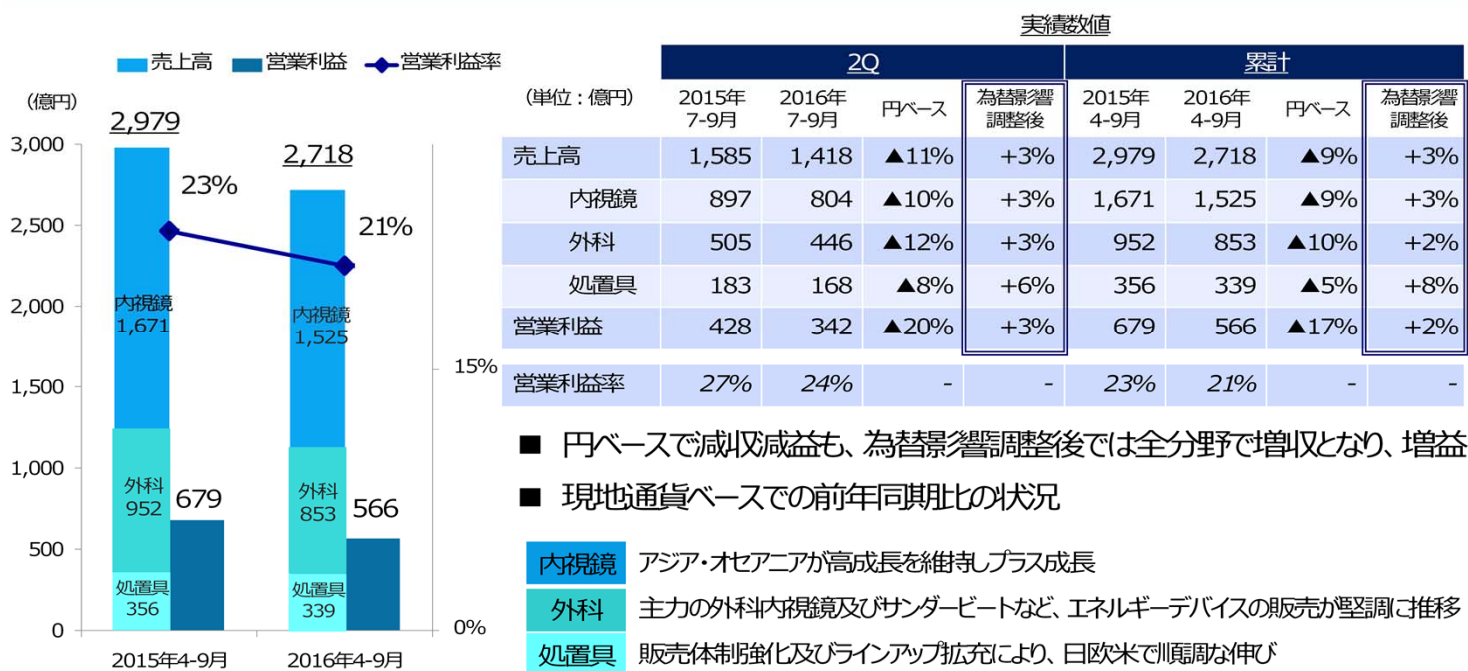
(※) 親会社株主に帰属する当期純利益

OLYMPUS

(スライド12)

- スライドの12ページをご覧ください。
- 上期の連結実績です。
- 売上高は前年同期比12%減の3,500億円、営業利益は31%減の344億円、経常利益は34%減の288億円、当期純利益は38%減の222億円となりました。
- 第1四半期に続き、第2四半期も円高基調が継続したことが、業績に大きく影響しております。
- 一方、中期計画の実現と通期見通しの達成に向けて投資すべきもの、抑えるものを見極め費用をコントロールしたことで、営業利益は54億円改善しており、見通しを大きく上回る結果となりました。
- 営業利益率についても約10%となり、厳しい円高基調の中で、収益性を確保しています。
- 事業別の概況について次のスライドから詳しくご説明します。

2017年3月期 第2四半期実績 ③医療事業



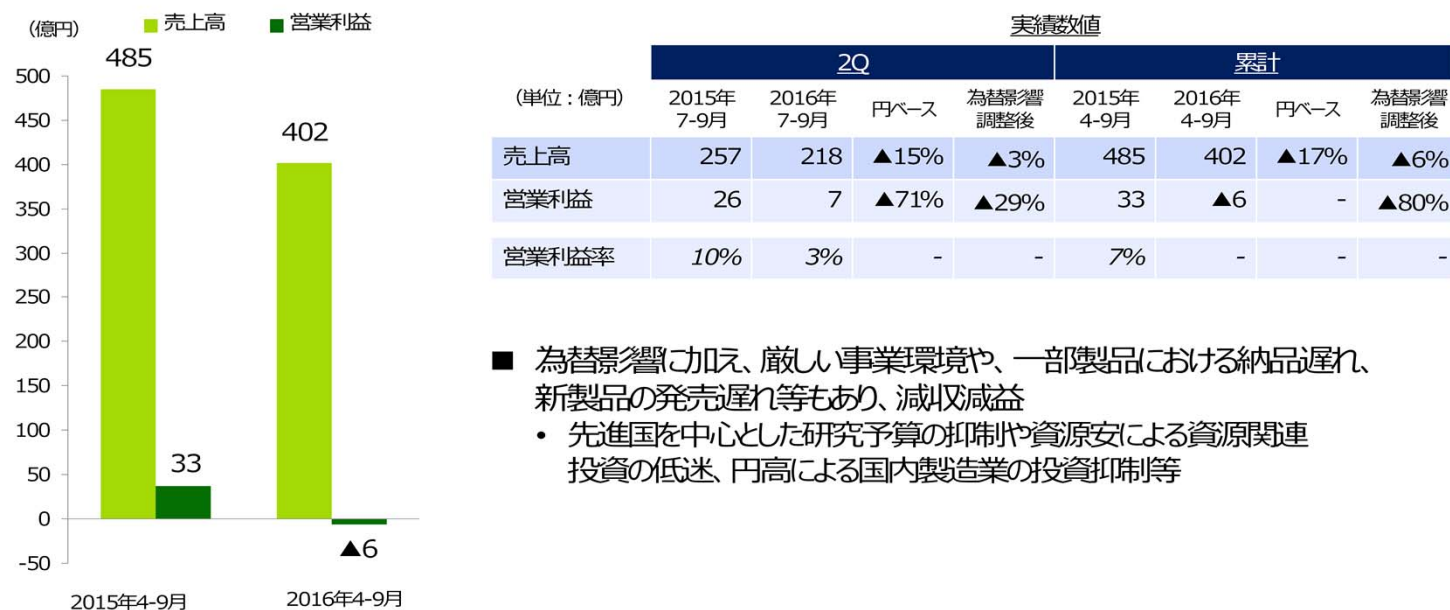
13 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

OLYMPUS

(スライド13)

- スライドの13ページをご覧ください。
- 医療事業です。
- 第2四半期の累計実績は、売上高は前年同期比9%減の2,718億円、営業利益は17%減の566億円、営業利益率は2ポイント減の21%となりました。
- 円高の影響により、円ベースでは減収減益となりましたが、現地通貨ベースでは全分野で増収を確保しております。
- 営業利益についても、利益創出に向けたコスト管理を徹底したことにより、プラス成長を達成しています。
- 内視鏡分野では、2桁増収を続けるアジア・オセアニア地域が成長に貢献し、現地通貨ベースで+3%の増収となりました。
- 外科分野は、3D/4Kのデファクトスタンダード化に向けた販促活動を鋭意進めております。また、サンダービートなどのエネルギーデバイスも堅調に推移しており、この第2四半期でグローバルでの販売本数が前年同期比で2割増を達成しています。
- 処置具分野は、販売体制を強化してきた効果が継続していることに加え、製品ラインアップの拡充等により最大市場の北米で2桁増収と好調に推移し、グローバルでも現地通貨ベースで8%の増収となりました。

2017年3月期 第2四半期実績 ④科学事業



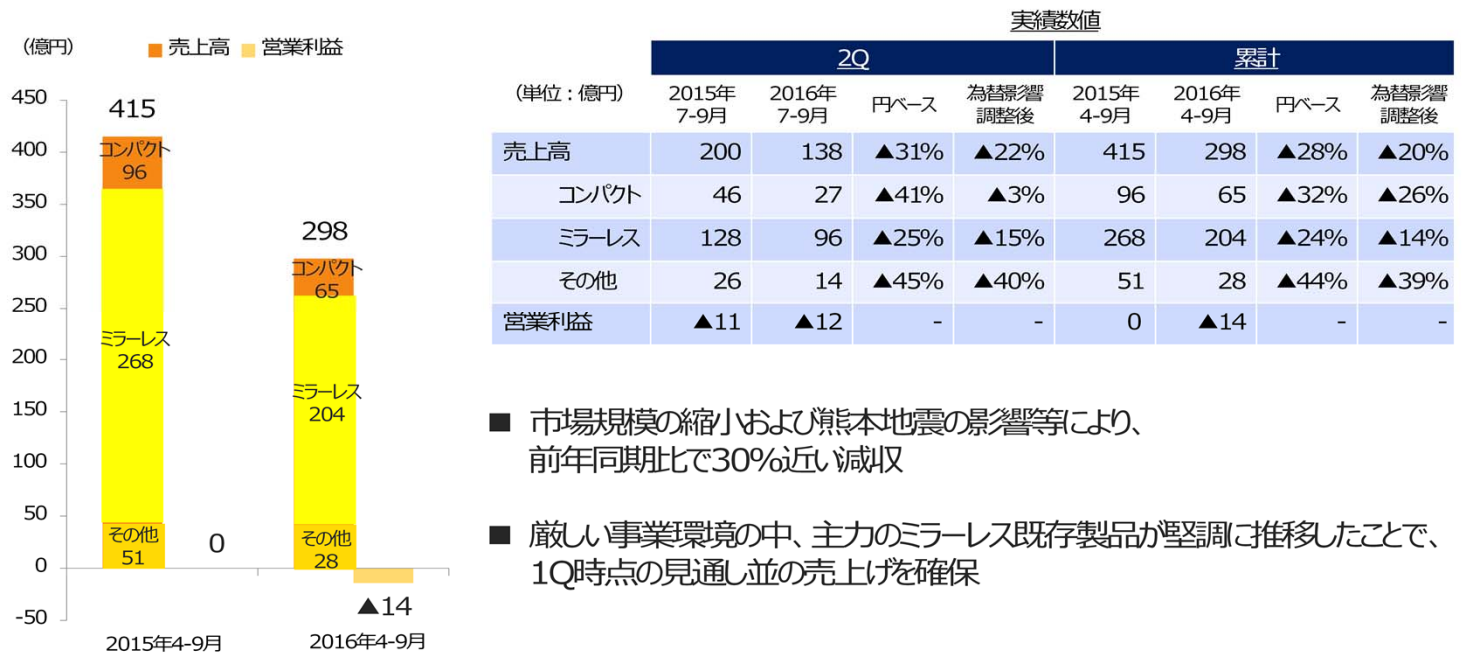
14 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

OLYMPUS

(スライド14)

- スライドの14ページをご覧ください。
- 科学事業です。
- 第2四半期の累計売上高は前年同期比83億円減の402億円、営業損益は6億円の損失となり、大変厳しい結果となりました。
- 減収の主な要因は、先進国を中心とした研究予算の抑制や資源関連投資の低迷、円高の影響など、外部環境の変化に加えて、一部製品の納品遅れや新製品の発売遅れなどが影響しました。
- 今後につきましても、厳しい事業環境は継続すると見ていますが、上期に発生した新製品の発売遅れの影響は既に解消しており、下期以降も顧客群戦略を推し進めて参ります。

2017年3月期 第2四半期実績 ⑤映像事業



15 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

OLYMPUS

(スライド15)

- スライドの15ページをご覧ください。
- 映像事業です。
- 第2四半期の累計売上高は前年同期比28%減の298億円、営業損益は14億円の損失となりました。
- 前年同期はOM-Dシリーズ、PENシリーズなどのミラーレスの販売が好調だった一方で、今年度は新製品投入が下期以降に予定されていることが影響しています。
- なお、前年同期比では減収減益となりましたが、既存製品の価格維持によって想定に沿った売上高を確保したことに加えて、利益率の改善も図ったことで、営業利益は前回見通しを上回りました。

連結貸借対照表 (2016年9月末) ① バランスシート

- 純資産 : 円高を受けた為替換算調整勘定のマイナス影響により、3,552億円
- 有利子負債 : 234億円圧縮し、2,977億円
- 自己資本比率 : 為替影響により、純資産は減少しながらも、有利子負債を圧縮したことで39.2%

(単位: 億円)	2016年 3月末	2016年 9月末	増減額		2016年 3月末	2016年 9月末	増減額
流動資産 (デジカメ在庫)	5,207 (144)	4,646 (122)	▲561 (▲22)	流動負債	2,666	2,508	▲158
有形固定資産	1,661	1,607	▲53	固定負債 (内: 社債・長期借入金)	3,497 (2,645)	2,947 (2,222)	▲550 (▲423)
無形固定資産	1,508	1,271	▲237	純資産	3,843	3,552	▲291
投資その他資産	1,631	1,484	▲147	(自己資本比率)	(38.2%)	(39.2%)	(+1.0pt)
資産合計	10,006	9,008	▲998	負債 純資産 合計	10,006	9,008	▲998

有利子負債: 2,977億円 (2016年3月末比▲234億円)

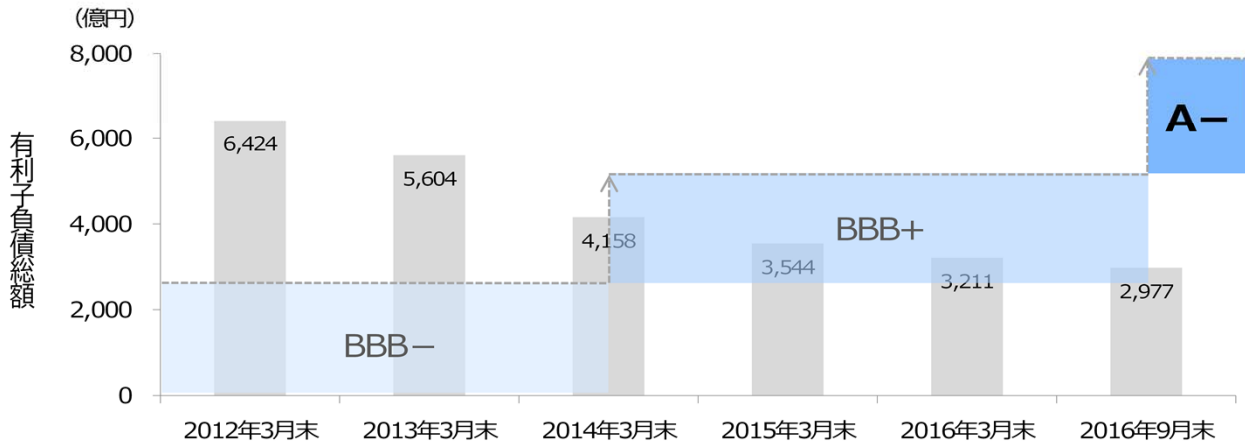
(スライド16)

- スライドの16ページをご覧ください。
- バランスシートの状況です。
- 総資産は継続的な財務体質の改善に加え、為替の影響により、前期末比で約1,000億円減少の約9,000億円となりました。
- また、円高の影響により為替換算調整勘定が約440億円変動したことにより、純資産は約3,550億円と前期末比で約290億円の減少となったものの、有利子負債等、負債を圧縮したことにより、自己資本比率は2016年3月末比で1ポイント改善し、39.2%となりました。

連結貸借対照表 (2016年9月末) ②トピックス

■ 格付け向上

- 株式会社格付投資情報センターが当社の発行体格付を「BBB+」→「A-」に引き上げ (10月7日)
- 継続的な有利子負債削減、自己資本の充実への取り組みにより、ここ数年で着実に進んだ財務改善を評価



17 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

OLYMPUS

(スライド17)

- スライド17ページをご覧ください。
- こうした継続的な財務体質の改善が評価された結果、格付投資情報センター (R&I) による当社発行体格付けが、不祥事以降で初めてシングルAマイナスまで回復しました。
- 医療事業から生み出される安定的なキャッシュ・フローに加えて、有利子負債削減や自己資本の充実など、継続的な財務体質改善への取り組みが実を結んだものと考えております。
- 申し上げるまでもなく、これは成長投資に向けた資金調達の高多様性の観点からも大きな前進となりました。

連結キャッシュフロー計算書 (2016年4月～2016年9月)

■ 事業の成長に向けた投資を着実に行いつつ、87億円のフリーキャッシュフローを確保

(単位：億円)	2016年3月期2Q	2017年3月期2Q	増減
売上高	3,958	3,500	▲458
営業利益	501	344	▲157
(営業利益率：%)	12.7%	9.8%	▲2.9pt
営業CF	549	414	▲135
投資CF	▲275	▲327	▲53
財務CF	▲431	▲242	+189
キャッシュフロー	▲157	▲156	▲1
フリーキャッシュフロー	274	87	▲187
現金及び現金同等物期末残高	1,949	1,387	▲562
減価償却費	194	227	+33
のれん償却額	50	42	▲8
設備投資額	318	284	▲34

OLYMPUS

18 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

(スライド18)

- スライドの18ページをご覧ください。
- 続いて、キャッシュフローの状況です。
- 営業キャッシュフローは、医療事業を中心とした事業活動からの利益を中心に414億円となりました。
- 投資キャッシュフローは、主力の医療事業や八王子市の開発拠点の設備投資などで327億円のマイナスとなりました。
- 以上により、フリーキャッシュフローは87億円のプラスとなります。

2017年3月期 通期業績見通し

(スライド19)

- それでは、2017年3月期通期の業績見通しについてご説明いたします。

2017年3月期 通期業績見通し

- 1 通期においてもコスト管理を徹底し、営業利益率として約10%の収益性を維持
- 2 当期純利益は、子会社株式譲渡により特別利益の計上や繰延税金資産の計上などによる税金費用の改善により、前回見通しの570億円を据え置き

(単位：億円)	2017年3月期 (1Q時見通し)	2017年3月期 (最新見通し)	増減額	1Q時見通し比	為替影響調整後 1Q時見通し比
売上高	7,750	7,430	▲320	▲4%	▲3%
売上総利益 (売上総利益率)	5,138 (66.3%)	4,960 (66.8%)	▲178 (+0.5pt)	▲3%	▲2%
営業利益 (営業利益率)	770 (9.9%)	720 (9.7%)	▲50 (▲0.2pt)	▲6%	▲1%
経常利益 (経常利益率)	670 (8.6%)	600 (8.1%)	▲70 (▲0.5pt)	▲10%	
当期純利益(※) (当期純利益率)	570 (7.4%)	570 (7.7%)	— (+0.3pt)	0%	
EPS	167円	167円	—		
円/USD	106円	105円	▲1円(円高)		
円/Euro	117円	117円	▲0円(円高)		
影響額：売上高	—	▲90億円			
影響額：営業利益	—	▲40億円			

2017年3月期年間配当
期末配当28円を予定

20 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

(※) 親会社株主に帰属する当期純利益

OLYMPUS

(スライド20)

- スライドの20ページをご覧ください。
- 通期見通しについては、円高が急速に進んだ英国ポンドおよび中国元の影響等により、前回見通し比で売上高を320億円修正。
- 営業利益は、為替影響に加え、上期に営業損失となった科学事業の見通しを引き下げたことを主要因に50億円修正しております。
- 売上高は前回見通し比で4%減の7,430億円、営業利益は6%減の720億円、経常利益は10%減の600億円となる見通しです。
- 当期純利益については、子会社株式譲渡による特別利益の計上や繰延税金資産の加算等による法人税の負担減少等により、前回見通しの570億円を据え置いております。
- 上期と同様に、通期においても効率的な費用の支出やコスト管理を徹底することで、約10%の営業利益率は確保できる見込みです。
- 尚、今期の配当についてはご案内の通り、当期の中間配当は行わず、期末配当として1株28円を予定しております。今後も引き続き財務基盤の強化と医療事業への成長投資を実施したうえで、株主還元を行い、皆様のご期待に応えて参りたいと思います。

2017年3月期 セグメント別業績見通し

- ① 医療事業 : 現地通貨ベースの営業利益を確保
- ② 科学事業 : 上期の実績や現在の事業環境を反映し、売上、営業利益とも修正
- ③ 映像事業 : ミラーレス普及モデルの価格維持による損益改善を織り込む

(単位: 億円)		2017年3月期 (1Q時見通し)	2017年3月期 (最新見通し)	増減額	1Q時見通し比	為替影響調整後 1Q時見通し比
医療	売上高	5,980	5,760	▲220	▲4%	▲2%
	営業利益	1,200	1,170	▲30	▲3%	0%
科学	売上高	960	890	▲70	▲7%	▲6%
	営業利益	40	10	▲30	▲75%	▲63%
映像	売上高	620	650	+30	+5%	+5%
	営業利益	▲40	▲30	+10	-	-
その他	売上高	190	130	▲60	▲32%	▲32%
	営業利益	▲60	▲60	-	-	-
全社・消去	売上高	-	-	-	-	-
	営業利益	▲370	▲370	-	-	-
合計	売上高	7,750	7,430	▲320	▲4%	▲3%
	営業利益	770	720	▲50	▲6%	▲1%

21 2016/11/2 No data copy / No data transfer permitted

OLYMPUS

(スライド21)

- スライドの21ページをご覧ください。
- セグメント別の見通しです。
- 医療事業は、為替の影響等により前年同期比では減収減益となる見込みですが、営業利益は前回の見通しから、現地通貨ベースは変更はありません。
- 科学事業は、厳しい事業環境と上期の実績を踏まえて、売上高、営業利益とも修正しています。
- 映像事業については、ミラーレス普及モデルの販売価格維持や事業規模適正化に向けたコスト管理を徹底することにより、利益改善を図り、前回見通しとの対比で10億円の改善を見込んでいます。

OLYMPUS

- 本資料のうち、業績見通し等は、現在入手可能な情報による判断および仮定に基づいたものであり、判断や仮定に内在する不確実性および今後の事業運営や内外の状況変化等による変動可能性に照らし、実際の業績等が目標と大きく異なる結果となる可能性があります。
- また、これらの情報は、今後予告なしに変更されることがあります。従いまして、本情報及び資料の利用は、他の方法により入手された情報とも照合確認し、利用者の判断によって行って下さいようお願い致します。
- 本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。

- 16CSP初年度となる今期は円高の進行等、急激な外部環境変化により、厳しいスタートとなりました。
- しかしながら、主力の医療事業については堅調に推移しており、また、医療ニーズの増大や症例数の増加など、事業を取り巻く中長期の環境認識に変化はありません。引き続き経営陣一丸となり、16CSPの最終年度である2021年3月期の経営目標達成に向け、取り組んでいく考えです。
- 私からの説明は以上です。ご清聴ありがとうございました。